

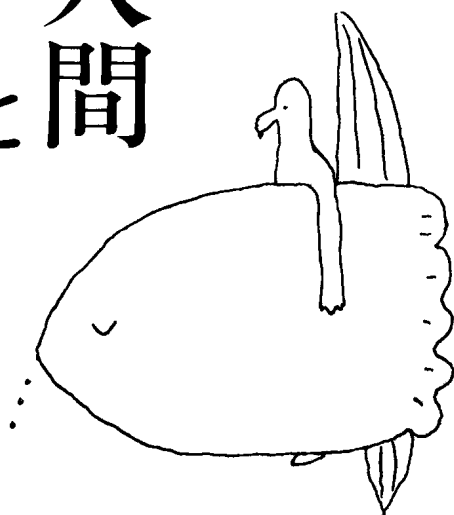
アノボウ

人間

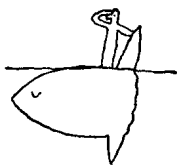


人間と

マンボウ



北杜夫 中央公論社



人間とマンボウ

© 1972 検印廃止 定価 430 円

昭和47年11月10日 印刷

昭和47年11月20日 発行

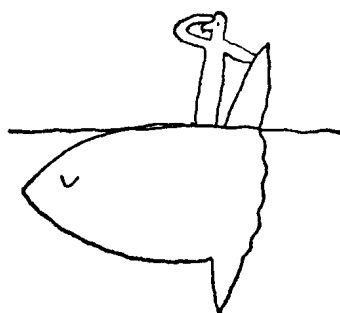
著者 北 杜 夫

発行者 山 越 豊

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京34番



1972年
中央公論社

目次

I

表面的な思い出など——三島由紀夫氏

同人誌時代の追憶——保高德藏氏

甲斐ない推察——川端康成氏

II

鬼座長について——遠藤周作氏

車——遠藤周作氏

狐狸庵先生にはかなわぬこと——遠藤周作氏

神さまの舌——遠藤周作氏

夢のようなへんな話——獅子文六氏

非地球的人間——埴谷雄高氏

56 53 52 49 46 43 37 21 3

ヨガ式・阪神を優勝させる法

麻布中学のことなど——吉行淳之介氏

端正さと……——辻邦生氏

貪欲なる偉才——手塚治虫氏

どうも、どうも——手塚治虫氏

先んずれば——矢代静一氏

ムツゴロウ氏の本——畑正憲氏

若い日の羞恥——八千草薫さん

前畑がんばれ

ガロイ氏との一夜など

メルバーンの手紙

■

芥川龍之介と私

齒車

好きな箴言

「魔の山」の思い出

長篇の愉しみ

ヘミングウェイの自殺

馬鹿について

Ⅳ

晩年の父

山莊の父

茂吉とその悪妻

茂吉と食物

茂吉断片

父の癖など

茂吉と光太郎

v

阿川弘之文学紀行

三浦朱門文学紀行

夏目漱石文学紀行

掲載書誌紙一覧

148

155

165

175

196

装幀・カット
長新太

人間とマンボウ

表面的な思い出など——三島由紀夫氏

三島由紀夫氏についての記憶の断片を、憶いだすままにとりとめなく綴ってゆこうと思う。おそらくはごく表面的なこと、いや、殊さら表面的な些事を書こうと思う。

三島さんとはじめてお会いしたのは、私がまったく無名の時代であった。「幽霊」の自費出版本はすでに出していて、奥野健男氏の「太宰治論」の出版記念会に行った折、そのあとの二次会の店へゆくタクシーの中で、たまたま三島さんと奥野さんと私とが同乗した。或いは帰途だったかも知れぬ。そこいらの記憶は曖昧である。

むしろ私にとって、ずっと以前から、三島さんはぜんぜん別世界の住人とも思える確乎とした作家

であった。私は旧制高校にいたところから、「人間」誌上に登場した三島さんの短篇を愛読していたし、古本屋で「花ざかりの森」を見つけて買ったりしており、その実物を目のまえにして震えおののくような存在であることは確かであった。しかし、当時、私は生意気盛りの文学青年で、殊に酔うとそれが甚しかった。ふだんは丁寧な言葉を使うのだが、その言葉の内容がいけなくて「文芸首都」の保高みさ子さんもよく「インギン無礼」だと言っていた。まして、もっと酔っぱらうと、「絶対無礼」ともいふべき言葉を発したりした。

そんな習癖以上に、そのときの私には、雲の上の人とも感じられる三島さんに対する、若者の無鉄砲な気負いのようなものがあつたことは争えない。(三島さんが太宰治氏に会いに行ったときも、次元はまったく異なるが、それに通ずる気負いはあつたと思われる。)車の中で、私は三島さんに、『仮面の告白』にて、ふと書かれてゐるが、あれはやはりちやうどでしょう』と言つた。それだけならいい、酔いと目くらみのなせるわざで、

「少しは辞書を引いてください」

と、確かに言つてしまつたのだ。そのとき三島さんは、

「しかし君、江戸時代の謡曲やなんかに、てふどとちゃんと出ているよ」

という意のことを言つた。私はギリリとしたけれど、あとで少し調べて、

「江戸時代は文法がひどく乱れています。やはり、今の旧仮名遣いなら、てふどはちやうど……」
という意のハガキを送つた。もとより返事はなかった。

奥野さんからあとで聞いたところによると、三島さんはそのときの私の暴言について非常に立腹さ

れ、その夜のうちに彼に電話をかけてきて、

「ああいう失礼な男とばくを会わさんでくれ」と声を荒げ、奥野氏が「彼は才能のある男で」とか弁護しようとする、「才能があろうがあるまいが、ああいう無礼な男はおれは絶対に認めん」と言い、奥野氏は弱ったそうだ。

私にしても、奥野さんからこの話を聞き、どんなに後悔したことだろう。もう一生、三島さんとは縁がない、と私は思った。

だが、それから四年ほど経って、私がいわゆる文壇に出た年、昭和三十五年の五月、日本丸という帆船の東京湾内航海に乗船したとき、私は再度、三島さんと会うことになった。曾野綾子さん（前から交際があった）と会い、「三島さんがきていらして、北さんにお会いしたいと言ってられましたよ」と言われたとき、私は仰天し、なにより前述の過去の事柄を思いだして、恐怖の念を抱いた。

しかし、三島さんは、かつてのことを露ほども現さなかった。

「三島です。はじめまして」

と、明快に挨拶されたのを、私ははっきりと覚えている。そのときは鼻をつままれたような気分だったが、「はじめまして」という言葉は、頭のいい三島さんが以前のことをまるきり忘れていたとはどうしても思えない。

ともあれ、三島さんはその短い東京湾内の航海が終ったあと、「食事でもどうですか」と言われ、私を銀座の或るビーフステーキの専門店に誘ってくださった。そのとき、奥さまが運転手だったが、三島さんはその助手席のドアをサッと開け、「さ、どうぞ」と言った。外国では助手席が上等の席だ

が、私はそれに慣れておらず、いささか戸惑ったものだ。

そのビフテキはおいしかった。だが、ここでも私は大失策をやった。小柄で魅惑的な奥さまが、「北さんはどうしてまだ結婚なさらないの？」と訊かれたのに対し、私はまた逆上して、「そろそろ結婚しようと思っていたんですが、奥さまを見ていると、その勇気が失われました」なぞと言った。自分ではユーモアのつもりなのだが、これでは行きすぎで、聞きようによっては途方もない暴言というべきである。さすがの三島さんも、そのときはちょっと困ったような気配を見せて、

「北さんほど思ったことをズケズケ言う人はいない」

という意を奥さまに説明するようにおっしゃった。私は私で内心、またしくじったと冷汗をかいていた。

その翌年に私は結婚することになった。三島さんとはそれ以来（多分）お会いしてもいないし、文芸上では大先輩でありすぎるので、本来の私の内閉症のせいもあり、招待状も送らなかった。だが、ある雑誌の編集者を通じて、結婚式に行きたいという御意向を聞き、慌てて招待状を送った。すると、電光石火、他の誰よりも早く、祝いの品物が当時居候をしていた兄の家にとどいた。スペイン製の、葡萄酒を入れる酒びんであった。実用にはいささか不向きなの、しかしあくまで立派で洗練された感じの品物である。私はその早わざに感服し、なにより有難くて、その当時「私の宝物」という週刊誌のグラビアに、他にまともなものがないので、その酒びんを抱いた写真を撮ってもらったことがある。三島さんの他人に対する心くばりはこのような電光石火の、しかも心のこもったものが多かった

といろいろな人から聞いた。

その私の披露宴の折、勤めていた大学病院の教授が祝辞を述べた。北君もがんばって、獅子文六のような文豪になって欲しい、というようなスピーチである。獅子氏は私の敬愛する作家だが、その医学部教授のスピーチは全体としてどこかちょっとピントが外れていた。招いた作家たちの席あたりからひとしきり笑声が起った。その中で、三島さんの高らかな笑聲は私の耳にまでひととき大きく傍若無人に伝わってきたものである。

私が三島さんに次に招かれた料理屋は、あの事件の前に楯の会の青年と食事をされたという「末げん」であった。奥野氏と一緒に、三島さんは鳥鍋をつつきながら、

「昔の文士はこうして鳥をつつきながら文学論をやったものだ」

と言った。

しかし、そのときは概して七面倒な文学論をやらず、もっぱらSFだの、むかしの「少年倶楽部」に載った小説のことなどを話した。三島さんはいそいそ乗気になって、南洋一郎「緑の無人島」がいかにすばらしくおもしろかったかを口を極めて力説した。もっとも「御自分でお書きになれば」というと、「ぼくにはああいうものは書けないよ」とあっさりとは断定的に言った。

そのあと行った酒場が、奥野氏の記憶によれば、「女神の像」「キス・ミー」というような名の店であったことは記しておいてよい。三島さんは作家たちの出入りするバーなどにはほとんど行かなかったようだ。私の知っている唯一の例外は、新宿にあった「とと」へ行ったとき、そのマダムがズバズバものを言う女性だったので気に入ったらしく、数日後、彼女をホテルのプールに呼んでいる。

ともあれ、その夜は前述のいかにも三流めいた店に行きあたりばったりに入り、その一つが大衆キヤバレーで、三島さんと知った女の子が大ぜい、手に手にナプキンを払ってサインをねだった。三島さんは快く、というより勢いこんだようなスピードで、マジック・ペンで次々とサインをした。私は女の子たちを整理し、「もうここらでダメ」という役柄を勤めた。

三島さんには何回か外で食事招かれたが、奥野氏、磯田光一氏と一緒に「第二浜作」で御馳走になったこともあるが、私の場合はほとんど奥野氏と二人のことが多かった。三島さんは客の取りあわせにも心をくばる方で、たまたま奥野さんと私が同じ中学でもあり、SFその他で話題もあうと思われたからであろう。

三島さんはSFでもなんでも夢中になる癖があり、一時は「空とぶ円盤」を半ば本気で信じていた様子であった。北村小松氏の影響らしく、いま紛失して見当たらないが、おおむね「昨夜は午前何時から何時までのあいだに、どここの方角に円盤が現れるはずだったので、ペランダでずっと待ったがついに現れなかった。次は何日の何時何分に現れる予定で、あなたもできたら起きていて観察してごらんなさい」という意のハガキを貰ったことがある。手元にある昭和三十六年十月のハガキの末尾にも、

「——このごろ手塚治虫も少々くたびれたらしく快作出ず、面妖奇々怪々なる本を何か教へて下さいませんか？ 空飛ぶ円盤の本も、全く新刊がありません」とある。

面妖奇々怪々も三島さんの趣味で、だしぬけに一冊の小説本をわざわざ送ってくださったことがあ

る。題名を忘れてしまったが、黒魔術についての大衆小説で、しかしごくこわいものであった。その旨を言うと、「こわいだろ、あれこわいだろ?」とわが意を得たりというような口調で言った。SFにしても、ブラッドベリはセンチメンタルだから大嫌いで、ヴァン・ヴォクトのものが好きだと話した。ヴォクトには、いわゆる宇宙怪獣ではなく、もっと面妖な宇宙化物がよく出てくる。

嫌いといえ、私のマンボウ調のものも嫌いらしかった。「船乗りクブクブの冒険」という少年童話を書いたとき、

「ぼくはねえ、ガッカリしたよ」

と、どうしてあんなくだらぬものを書くのかと、ムキになって大不満の様子である。もとより書きなぐりの愚作だが、三島さんにしても、ずっと高級ではあれ別に氏が書かねばならぬというわけでないエンターテイメントをかなり婦人雑誌などに書いているので、なんでこんなに怒られねばならぬのかと内心ひそかにぼやいたこともあった。

或る婦人雑誌のグラビアに、人の失笑を買うような、だらしない写真を撮られたことがある。このときは名のあるカメラマン氏が現れ、いきなり持参したネンネコバンテンを突きつけて、これを着て、当時まだ幼かった私の子供をおぶれ、と言うのである。今の私なら当然断るはずだが、そのときは、相手の強引さに気を吞まれて、つい子供をおぶった。その写真が出ると、さすがに母が怒って電話をかけてきた。「あんなコメディアンみたいな真似をするものじゃありません」

同時に、三島さんもこの写真について怒った。どういう文句であったか忘れたが、要するに「みつともない」というのである。氏もいろいろと人の目を見はらせるに足る写真を撮らせている。しかし、